



筑紫女学園大学リポジット

An Analysis and Consideration on Classroom Management Plans

| | |
|-------|--|
| メタデータ | 言語: jpn 出版者: 公開日: 2018-02-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 石原, 努, ISHIHARA, Tsutomu メールアドレス: 所属: |
| URL | https://chikushi-u.repo.nii.ac.jp/records/953 |

学級経営案（小学校版）の内容分析及び考察

石 原 努

An Analysis and Consideration on Classroom Management Plans

Tsutomu ISHIHARA

1 問題と目的

現在の小学校の教育現場における問題の一つに、学級崩壊やいじめが挙げられる。これらの問題は、ある一つの原因によって生まれるものではなく、複合的な要因が積み重なって起こるものである。この原因や要因として、『学級経営をめぐる問題の現状とその対応』（国立教育研究所2000）では、次の7項目を挙げている。「学級担任の状況、学校の状況」「子どもの生活、人間関係の変化」「家庭・地域社会の教育力の低下」「現代社会の問題状況と教育課題」「子どもの集団生活や人間関係の未熟さ」「特別な教育的配慮や支援を必要とする子どもへの対応」「学級担任の指導力不足」である。この中の、「学級担任の状況」「学級担任の指導力不足」「子どもの集団生活や人間関係の未熟さ」「特別な教育的配慮や支援を必要とする子どもへの対応」の4項目は、教師の学級経営に対する力量や姿勢と深く関連している。鳥海・石井（2007）は、「近年問題となっている「いじめ」や「学級崩壊」は教師の適切な学級運営によって防ぐことができるケースが多い。」¹⁾と述べている。

以上のことより、学級崩壊やいじめ等の問題を解決していくために、また、その問題を未然に防ぐために、教師の学級経営に対する力量や姿勢が重要であるということがわかる。

ここで、『小学校学習指導要領解説特別活動編』（文部科学省 2009）をみってみる。この中に、特別活動の目標や内容として、「集団の一員として学級や学校におけるよりよい生活づくり」を推進していくことや、「学級経営の充実を図り、個々の児童について理解を深め、児童との信頼関係を基礎に指導を行うとともに、生徒指導との関連を図る」²⁾こと等が示されている。このように、教師には、日々の学級経営の中で、子ども一人一人に対する理解を深めたり、子どもと子ども・教師と子どものよりよい人間関係の構築に向けた取り組みを進めたり、まとまりのある学級集団をつくったりしていくことが求められているのである。

そこで、小学校教師の学級経営に焦点を当て研究を進めていくこととした。本論でいう学級経営とは、学級組織をよりよく運営し教育活動を充実させていくための教師の経営方針と位置付ける。授業運営も、学級経営をよりよく展開していくために欠かすことのできない視点ではあるが、今回の研究においては、授業経営に関する教師の経営方針は除外することとした。

小学校における学級経営は、基本方針を立てる計画立案段階、立てた学級経営の方策を実践する

段階、実践を振り返り修正等を加えながら新たな方策を立てる段階の3つの過程があり、この3つの過程を繰り返しながら進めていくのが一般的である。今回の研究では、第1の段階として挙げられる学級経営の基本方針を立てる際に作成する学級経営案の内容分析を通して、小学校教師の学級経営における取組を明らかにしていく。ここでいう学級経営案とは、各年度初めの段階で、学級経営の方針を立て、それを端的にまとめて記述した文書のことである。

具体的な研究の目的や研究の進め方の概要を以下に示す。

まず、先行研究等で明らかになっている学級経営に関する要因や要素等を抽出し、分類・整理する。次に、小学校教師が作成した学級経営案の内容分析を行い、先行研究で明らかになった要因・要素に関連づけを行いながら修正したり、新たな要因・要素等を付加したりする。これらを通して、小学校教師の学級経営に関する要因・要素、具体的な取組等を明らかにし、それらの価値や意義について考察することを目的とする。

2 小学校教師の学級経営の要因・要素の分類・整理

(1) 目的

先行研究の中から、小学校教師が学級組織をよりよく運営し教育活動を充実させていく際に必要となる要因や要素を抽出し、分類・整理することを目的とする。

(2) 学級経営の要因・要素の抽出

林・木村(2016)の研究では、学級経営におけるコンピテンシー要因として、20項目挙げている。その中で、今回の研究と関連性の深い項目は、以下の16項目であった。「よりよい学級経営をめざす教師としての姿勢」「問題解決のための姿勢」「問題に関する情報を得ようとする姿勢」「子どもや保護者を理解しようとする姿勢」「子どもや保護者のニーズに応えようとする姿勢」「教師の願いや思いを子どもや保護者に伝える」「子どもや保護者、教職員と関係を築く」「子どもや保護者、教職員に期待をもち、向上させる」「問題や出来事を細分化して理解し、システムティックに組織化して理解しようとする姿勢」「問題や状況間に関連性を見出し、有効性の高い関係を見つけ出す」「教育実践に関連する知識をもち、専門能力をより向上させていく」「強いストレス場面でも、自分の感情をコントロールすることができる」「自分自身の能力に対する信念や確信をもつ」「何をすべきか指示する指揮的行動」「教育環境を整備する」「状況を客観的に認識し、柔軟に対応できる」である。

岩島(2012)は、話し合い活動と学級経営に関する研究を行っており、その中で「学級活動の話し合いを中核にした実践は、学級経営の集団づくりや人間関係づくりを充実させるために有効に働いている。」³⁾と述べている。

『学級運営等の在り方についての調査研究』(国立教育政策研究所 2005)では、学級運営と生徒指導の充実改善の基本的方向として5つの視点を挙げており、本研究と関連の深い項目は、「児童理解の深化」「人間関係づくりや自己指導力の育成」「生徒指導体制の充実改善」の3点であった。

石川(2016)の調査研究によると、小学校教師の学級経営上の役割として、「個と個をつなぐ」「ルールや基準を示す」「自主性の育成」ということが挙げられている。

菅野(2008)は、教師の休み時間における子どもとの関わりについて、「休み時間や給食指導、清掃指導の場も重要な信頼関係づくりの場である。」³⁾と述べている。

鳥海・石井(2007)の研究によると、「班活動(グループコミュニケーション)」を行うことによって、孤立児童を大幅に減少させる効果があることが明らかになっている。また、相互に友人と思っている関係も増加する傾向が見られ、学級集団形成において、班活動が優れた効果を挙げていることが明らかになっている。

『教員を目指そう』(文部科学省初等中等教育局教職員課2009)では、具体的内容として、「朝の会やホームルームの実施」、「面接等の方法で子ども一人一人の様子を把握」、「問題行動への対処」、「クラスの活動記録の作成」、「学級通信の作成」の5点が示されている。

『新編学級経営読本』(小島編 2008)では、学級内の好ましい集団づくり・人間関係づくりについての要因や場面、配慮を要する子どもへのアプローチとして、以下の点が挙げられている(下記に示すものは、文章中の語句から関係する文言を抜粋し要約したものである。。「教室環境の整備・清掃」(黒田)、「場面ごとの集団づくり(生活班、給食当番、清掃当番、係活動、委員会活動等)」、「話し合いの場面設定」(下条)、「人間関係を意識したグループづくり」(富永)、「教師の雰囲気づくり」(泉)、「学級の約束・ルールづくり」、「挨拶・返事」、「与えられた仕事は責任をもつ」(石毛)、「学級目標の設定」、「学級通信」、「担任の言葉掛け」(森)、「一人一人の役割分担」、「自発的な係活動」、「所属感や所属意識」、「自信をもたせる教師の関わり」(柴田)、「自己有用感が感じられる支持的学級風土づくり」(守田)、「朝の会・帰りの会の工夫」、「互いのよさを認め合う場」(傳田)、「子どもたちが安心できる居場所」、「学級活動での集団活動の実践」、「楽しく安全に過ごせる環境」、「言葉遣い」、「児童等の心の理解」、「児童等とのコミュニケーション」、「子どもの話をよく聴く」、「子どもの意見や悩みを受け容れる」、「子どもの気持ちやペースに寄り添う」、「公平に接する」、「一人ひとりの個性や生き方を見極めた援助」(有村)、「児童生徒が発する危険信号を見逃さない」、「いじめの構造と特徴を捉える」、「問題を軽視しない」、「カウンセラー等と連携を図る」、「人間関係形成力の育成」、「アンケート調査等を通じた実態調査」(北村)、「子どもの心に寄り添って子どもの不安を和らげる」、「自己決定をさせる機会の設定」(井上)、「学級内の人間関係の把握に努める」(嶋崎)、「丁寧かつ受容的な関わり」、「一人ひとりに公平」、「一人ひとりを大切に」、「受容的な雰囲気のある集団づくり」、「友達との関わりを十分に」、「自己表現の力を育てる」、「人権尊重の意識を育てる」(芳賀)が挙げられている。

『授業力&学級経営力』(2017. 5)では、学級づくりの極意として「学級開き」「教室環境づくり」「ほめ方・叱り方」「学級を団結させる」「コミュニケーション」という大きな視点をもとに、それぞれに以下のような取組が挙げられている。学級開きにおいては、「子どもの様子を知る。」が挙げられている。教室環境づくりにおいては、「学級目標」「理想の学級について掲示」「良い状態の環境を写真で掲示」「ゴミ拾い」「掲示物の更新」「机・ロッカーの整理」が挙げられている。ほめ方・叱り方においては、「子どもの姿の中から育てたい姿を探してほめる」「集団をほめるか・個

をほめるか」「叱るときは、短くはっきり伝える」「具体的にほめたり、叱ったりする」「よさを具体的に紹介する」「叱られた理由を具体的に説明する」「ほめるポイントを調整する」「基準をはっきりさせておく」「自然体で行う」が挙げられている。学級を団結させるためには、「一人ひとりのよさを認め合う」「劇をする」「友達のがんばりを見えるようにする」「自分の得意なことから始めるようにする」「目的・目標の共有」「秩序・ルールが存在と遵守」「互助・協力」「所属意識」「集団への誇り」「話し合い」が挙げられている。コミュニケーションをよりよくとるためには、「日記帳でのやりとり」「表情（笑顔）」「傾聴する」「成長を伝える」「学級通信」が挙げられている。

（3）学級経営の要因・要素の分類・整理

抽出した要因・要素をもとに、重なりがあるもの、親近感を覚えるものを踏まえながら分類・整理した。表1に、分類・整理し要約したものを示す。

表1 学級経営の要因・要素

| 要因と要素 | 要因・要素の定義 | 件数 |
|-----------------|---|----|
| I 教師としての構え | | |
| 1 教育観 | どのような子どもをはぐくむのかを明確にする | 10 |
| 2 諸問題への対応 | 多面的な視野で諸問題を分析・解決する力を付ける | 8 |
| 3 研修的態度 | 自らの指導力向上に向けた研修的な態度をもつ | 2 |
| 4 柔軟性 | 様々な事象に柔軟に対応する力を身に付ける | 2 |
| II 子どもとの信頼関係づくり | | |
| 1 子ども理解 | 傾聴する姿勢をもち、子ども一人ひとりの実態を的確に把握する 子どもの人間関係の理解に努める | 11 |
| 2 ほめ方叱り方 | 基準をもって、メリハリを付けてほめたり叱ったりする 子どもが納得するほめ方叱り方を行う | 10 |
| 3 基本姿勢 | 一人ひとりに自信をもたせることができるような関わりを行う 一人ひとりを大切にし公平に関わる | 7 |
| 4 受容的態度 | 子どもの意見を受容する態度を大切にする | 4 |
| 5 具体的な取組 | 子ども理解に向けた具体的な取組を行う | 3 |
| III 集団づくり | | |
| 1 具体的な取組 | 友人を関わる場（班活動・話し合い活動等）を積極的に取り入れ、よりよい人間関係づくりにつなげる 友人と互助・協力できる場を設定する 自主性・責任感等をはぐくむ取組を推進する | 14 |
| 2 認め合う風土づくり | 一人ひとりのよさを認め合うことのできる受容的風土を築く | 9 |
| 3 規範意識 | ルール・礼儀・マナー等の基準を明確にする | 6 |
| 4 目標設定 | 学級目標等を設定し、目標を共有化する | 4 |
| 5 所属意識 | 学級で団結することのできる場を設定する | 3 |
| IV 環境整備 | | |
| 1 教室環境 | 安全に楽しく過ごすことのできる教室環境を整える | 6 |
| 2 掲示物の作成 | 理想の学級を意識することのできる掲示を行う | 3 |

分類・整理の結果、大きく4つの要因に分けられた。第1要因として「教師としての構え」、第2要因として「子どもとの信頼関係づくり」、第3要因として「集団づくり」、第4要因として「環境整備」に分類した。以下にそれぞれの要因について説明する。

第1要因「教師としての構え」においては、「教育観」「諸問題への対応」「研修的態度」「柔軟性」

の4つの要素が抽出された。「教育観」では、自分自身の信念や確信をもつ・自主性を育成する・人権意識を育てる等、教師が、どのような子どもをはぐくみたいのかを明確にもっておく必要があることが明らかになった。「諸問題への対応」では、問題の情報を得ようとする姿勢・問題や出来事を細分化して理解する・問題を軽視しない等、諸問題を多面的に分析し、解決していく力が必要であることが明らかになった。「研修的態度」では、教育実践に関連する知識をもつ・専門能力を向上させる等、自らの指導力向上に向けた態度を有する必要があることが明らかになった。「柔軟性」では、状況を客観的に認識し、柔軟に対応・自分の感情をコントロールする等、様々な事象に柔軟に対応する力が必要であることが明らかになった。

第2要因「子どもとの信頼関係づくり」においては、「子ども理解」「ほめ方・叱り方」「基本姿勢」「受容的態度」「具体的な取組」の5つの要素が抽出された。「子ども理解」では、子どもの話をよく聴く・一人ひとりの個性や生き方を見極める・学級内の人間関係の把握に努める等、教師が子どもの意見を傾聴する姿勢をもち、子ども一人ひとりの実態把握や子ども同士の間関係の理解に努める必要があることが明らかになった。「ほめ方・叱り方」では、ほめる・叱るポイントをはっきりさせる・子どもの姿の中から育てたい姿を探してほめる・叱るときは短くはっきり伝える等、基準をもってメリハリを付けてほめたり叱ったりすることや子どもが納得するほめ方叱り方を行うことが大切であることが明らかになった。「基本姿勢」では、自信をもたせる関わり・一人ひとりを大切に・公平に接する等、一人ひとりに自信をもたせるような関わりを行うことや一人ひとりを大切にし公平に関わる姿勢が必要であることが明らかになった。「受容的態度」では、子どもの心に寄り添う・子どもの意見や悩みを受け容れる・表情（笑顔）等、子どもの意見を受容しようとする教師の姿勢が大切であることが明らかになった。「具体的な取組」では、アンケート調査を通して実態把握をする・面接を通して一人ひとりの様子を把握する等、子ども理解に向けた具体的な方策があることが明らかになった。

第3要因「集団づくり」においては、「具体的な取組」「認め合う風土づくり」「規範意識」「目標設定」「所属意識」の5つの要素が抽出された。「具体的な取組」では、場面ごとの集団づくり（生活班、給食当番、清掃当番、係活動、委員会活動等）、話し合いの場面設定・朝の会、帰りの会・個と個をつなぐ・互助・協力・学級通信の作成・自発的な係活動・一人一役の役割分担等、友人と関わる場を積極的に位置付け、友人と互助・協力しながら活動を展開し、子どもの自主性・自発性を高めていくことが大切であることが明らかになった。「認め合う風土づくり」では、よさを具体的に紹介する・互いのよさを認め合う場・自己有用感が感じられる支持的学級風土づくり等、一人ひとりのよさを認め合うことのできる受容的風土を築くことが大切であることが明らかになった。「規範意識」では、秩序、ルールが存在と遵守・学級の約束、ルールづくり・挨拶、返事等、ルール・礼儀・マナー等の基準を明確にする必要があることが明らかになった。「目標設定」では、学級目標・目的、目標の共有等、学級目標を設定し、目標を共有化することが大切であることが明らかになった。「所属意識」では、劇をする・集団への誇り・学級活動での集団活動の実践等、学級で団結することのできる場を設定する必要があることが明らかになった。

第4要因「環境整備」においては、「教室環境」「掲示物の作成」の2つの要素が抽出された。「教

室環境」では、教室環境の整備、清掃・机、ロッカーの整理等、安全に楽しく過ごすことのできる教室環境づくりが大切であることが明らかになった。「掲示物の作成」では、理想の学級について掲示・良い状態の環境を写真で掲示等、自分たちが目指す学級像を意識することのできる掲示を行うことが大切であることが明らかになった。

3 学級経営案の分析

(1) 目的

先行研究で明らかになった学級経営の要因・要素と小学校教師が作成した学級経営案の内容とを関連づけながら分析し、小学校教師の学級経営における要因・要素・具体的な取組を明らかにする。また、抽出した要因・要素の価値や意義について考察することを目的とする。

(2) 方法

① 調査時期と手続き

2016年5月中旬から9月上旬にかけて、郵送及び、メールにより調査依頼用紙を500部配付し、郵送により学級経営案を回収した。対象とした学校地域・教師は特定せず、ランダムに抽出した。回収率は、68%であった。回収した学級経営案の中で、諸情報が不明なものを今回の調査対象から除外し、最終的に333部の学級経営案を調査対象とした。

② 調査協力者の属性

調査協力者の属性（担当学年・性別）を表2に示す。

表2 調査協力者の属性

| 学年 | 男 | 女 | 計 |
|----|-----|-----|-----|
| 1 | 21 | 37 | 58 |
| 2 | 23 | 24 | 47 |
| 3 | 28 | 27 | 55 |
| 4 | 33 | 25 | 58 |
| 5 | 37 | 20 | 57 |
| 6 | 47 | 11 | 58 |
| 計 | 189 | 144 | 333 |

③ 分析方法

学級経営案の中に記されている文章や語句の中から、学級組織をよりよく運営し教育活動を充実させていくことに関する内容について、調査者を含む4名の評定者で抽出した。次に、抽出した文章や語句と、表1「小学校教師の学級経営の要因・視点」を比較・検討し、小学校教師の学級経営の取組をカテゴリー化した。カテゴリー化は、調査者を含む4名の評定者で行った。第1回目的一致率は48%であった。これは、抽出した文章において、2つ以上のカテゴリーが含まれていることが多かったためである。そこで、2つ以上のカテゴリーを含むと考えられる文章や語句については、

それぞれのカテゴリーにおいてカウントすることとした。4回の検討を重ね、新たなカテゴリーを作成し、一致率を高めた。

(3) 結果

① 学級経営の要因や要素の抽出とカテゴリー化

全333部の学級経営案の中から、学級組織をよりよく運営し教育活動を充実させていくことに関する文章や語句を4398箇所抽出し、それらをカテゴリー化した結果、4要因12要素となった。学級経営の要因は、第1要因「教育理念」、第2要因「集団形成」、第3要因「子ども理解」、第4要因「教室環境」の4つとなった。第1要因「教育理念」については、「豊かな心の育成」「健康教育」「その他の理念」の3つの要素に整理した。第2要因「集団形成」については、「目標設定」「規範意識」「支持的風土」「自治的・集団的活動」の4つに整理した。第3要因「子ども理解」については、「信頼関係」「実態把握」「問題対応」の3つの要素に整理した。第4要因「教室環境」については、「環境美化」「掲示物の作成」の2つの要素に整理した。表3にカテゴリー（要因・要素）とその定義、及び、抽出件数を示す。また、表4～7に、各要素の具体的記述例を示す。

表3 学級経営の要因・要素（カテゴリー）とその定義、及び、抽出件数

| カテゴリー | カテゴリーの定義 | 件数 |
|----------------|---|-----|
| I 教育理念 | | |
| I-1 豊かな心の育成 | 思いやり・感謝・協力等、子どもの豊かな心の育成につながる教師の考え方や方針 | 685 |
| I-2 健康教育 | 体力向上・食育・基本的な生活習慣等、子どもの健康の保持増進に向けた教師の考え方や方針 | 352 |
| I-3 その他の理念 | その他のはぐくみたい子ども像等に対する教師の考え方や方針 | 374 |
| II 集団形成 | | |
| II-1 目標設定 | 学級目標や生活目標等、目標の設定とそれに関する取組 | 508 |
| II-2 規範意識 | 学級のルールづくりやそれに関する指導等、規範意識の向上に向けた取組 | 447 |
| II-3 支持的風土 | 他のよさを認め合うことのできる場の設定・子どもの居場所づくり等、学級の支持的風土づくりに向けた取組 | 371 |
| II-4 自治的・集団的活動 | 話し合いの場や集団で活動する場を設定する等、子どもが主体となって活動を推進する取組 | 369 |
| III 子ども理解 | | |
| III-1 信頼関係 | 子どもとの対峙の仕方や子どもと向き合う基本姿勢等、子どもとの信頼関係を築くための取組 | 398 |
| III-2 実態把握 | 面談やアンケートの実施等、子どもの実態把握に向けた取組 | 343 |
| III-3 問題対応 | 基本的な生活指導を行う際の方針や問題発生時の対応の仕方等、諸問題発生時の取組 | 159 |
| IV 教室環境 | | |
| IV-1 環境美化 | 清掃活動や環境整備等、安全に楽しく過ごすことのできる環境整備に関する取組 | 290 |
| IV-2 掲示物作成 | 合言葉・目標・子どもの成長の様子等の掲示物の作成に関する取組 | 102 |

表4 第1要因「教育理念」に関する具体的記述例

| I 教育理念 | 要素 | 具体的記述例 |
|--------|---------|---|
| I-1 | 豊かな心の育成 | <ul style="list-style-type: none"> ・ 周り（人・もの・こと）への感謝の気持ちをもって生活することのできる子どもを育成する。 ・ いじめは絶対に許されないことを徹底し、相手を傷つける言葉を0にする。 ・ 相手の気持ちを考えながら行動できる子どもを育成する。 ・ 人や動植物を大切にすることができる子どもをはぐくむ。 ・ 物を大切に扱う指導を行い、感謝の気持ちへつなげる。 |
| I-2 | 健康教育 | <ul style="list-style-type: none"> ・ 安全な登下校の仕方について指導する。 ・ 給食の食べ残しを少なくできるように指導を行い、「食」の大切さ等の関心を高める。 ・ 早寝、早起き、朝ご飯を励行する。 ・ 手洗い、うがい、歯磨き等の指導を通して、基本的な生活習慣を確立する。 ・ 業間の体育的活動を継続して行き、体力の向上へつなげる。 |
| I-3 | その他の理念 | <ul style="list-style-type: none"> ・ 最後まであきらめず根気強く取り組むことができる子どもを育成する。 ・ 何事にも全力で向かうことができる子どもを育成する。 ・ 失敗を恐れずにチャレンジしていく子どもを育成する。 ・ 継続した取組を行うことを通して、自分自身への自信を高める。 ・ 困難に立ち向かい、継続して努力する子どもをはぐくむ。 |

表5 第2要因「集団形成」に関する具体的記述例

| II 集団形成 | 要素 | 具体的記述例 |
|---------|-----------|--|
| II-1 | 目標設定 | <ul style="list-style-type: none"> ・ 学級目標を設定する。 ・ 子どもの姿をもとに、月目標を設定する。 ・ 毎学期、毎月、毎日の自分のめあてを設定させる。 ・ 毎月の生活目標を設定し、それについて自分なりに振り返ることができるようにする。 ・ 行事に向けた合言葉を設定し、目標達成に向けた取り組みを進める。 |
| II-2 | 規範意識 | <ul style="list-style-type: none"> ・ 学級の実態に応じた集団行動のきまりを決め、約束事を確認する。 ・ みんなが気持ちよく過ごすことのできる学級のルールをつくる。 ・ 善い行い、悪い行いをしたときは、タイミングよくほめたり叱ったりする。 ・ 叱るときは、なぜ叱られているのか子どもが納得できるように指導する。 ・ けじめのある学級集団を目指し、時間を守る・場を考える・礼を正すの3つの約束を設定する。 |
| II-3 | 支持的風土 | <ul style="list-style-type: none"> ・ 友達の活動を随時紹介し、他へ関心を向けることができるように関わる。 ・ 相手の気持ちを考えて行動した際、その行動のよさを価値付けし全体に広めていく。 ・ グループエンカウンターを活用し、友達を肯定的に捉える風土をつくる。 ・ 「自分のよさを発見する」「相手のよさを発見する」この2点に留意し、よりよい人間関係づくりにつなげる。 ・ 友達のいいところを記入する「いいねカード」を作成し、豊かな人間関係づくりにつなげる。 |
| II-4 | 自治的・集団的活動 | <ul style="list-style-type: none"> ・ 子どもの主体性を高めるために、「話し合い→実践→振り返り」の場を設定する。 ・ 体育的行事に向けて、学級一丸となって取り組む場を設定する。 ・ 昼休みに全員で遊ぶ場を設定し、遊び係が中心となって運営を進める。 ・ 「一人一役」の仕事分担を位置付け、学級のために主体的に活動しようとする意識を育てる。 ・ 係活動の活性化に向けて、週に1回、中休みを活用し係会議の場を設定する。 |

表6 第3要因「子ども理解」に関する具体的記述例

| 要素 | 具体的記述例 |
|----------|---|
| Ⅲ-1 信頼関係 | <ul style="list-style-type: none"> ・常に子どもの話に耳を傾け、子どもが相談しやすいような信頼関係を築く。 ・毎日、全員の子どもと必ず何らかの言葉掛けや話をする。 ・善くない言動が見られたときでも、その理由を尋ねるように心がける。 ・学級通信や朝の会等で、発見した子どものよさを適宜伝えていく。 ・結果だけを評価するのではなく、活動の過程をしっかりと評価するように心がける。 |
| Ⅲ-2 実態把握 | <ul style="list-style-type: none"> ・「お話タイム」（一人ひとりとの会話）を設定する。 ・子どもの観察記録をとり、その資料を基に個人面談を行う。 ・教師も率先して子どもの遊びの輪に入り、子どもの様子を把握する。 ・月に1回の子どもアンケートをもとに、子どもの様子や変化を把握する。 ・個人面談等を通して、子ども一人ひとりの理解に努める。 |
| Ⅲ-3 問題対応 | <ul style="list-style-type: none"> ・個に対応する時間を子どもの状況に応じて見逃さずに設定する。 ・問題行動の裏側にある子どもの心理を踏まえながら指導する。 ・問題の背景を考えながら、様々な情報を収集して問題解決策を考える。 ・問題や子どもの状況に応じて、保護者等との連携を図る。 ・問題が起こったときは、話し合う場を設定して皆が納得できる対応を行う。 |

表7 第4要因「教室環境」に関する具体的記述例

| 要素 | 具体的記述例 |
|-----------|---|
| Ⅳ-1 環境美化 | <ul style="list-style-type: none"> ・給食後も、簡単な清掃を取り入れ環境美化に努める。 ・無言で行う清掃活動を行い、教室美化に努めることができるようにする。 ・ロッカーや整理棚等の荷物をきれいにそろえる指導を行い、整理することの気持ちよさを感じさせる。 ・毎時間の終わりに整理整頓を行う習慣づけを行う。 ・靴並べや道具の後片付けに関する指導を行う。 |
| Ⅳ-2 掲示物作成 | <ul style="list-style-type: none"> ・友達に言われてうれしかったことを掲示する。 ・自分たちの成長の様子を実感することができるように、年間を通して子どもの様子を掲示していく。 ・学級のルールを掲示しておき、掲示を通して意識付けを図る。 ・毎日、発見した子どものよさを掲示していく。 ・目標の達成度を随時掲示しながら、自分たちの姿を振り返りながら生活できるようにする。 |

4 考察

本研究の目的は、学級経営に関する要因・要素、また、それに関する具体的な取組等を明らかにし、その価値や意義について考察することである。以下に、本研究を通して明らかになった学級経営の要因・要素・具体的取組について考察する。

(1) 学級経営の全体構造

先行研究・学級経営案をもとに、小学校教師の学級経営に関する要因・要素を分類した結果、「教育理念」「集団形成」「子ども理解」「教室環境」という4要因が抽出された。これらの4要因を構

造化すると、まず、教師がどのような子どもをはぐくみたいのかという「教育理念」を描き、その実現に向けて、「集団形成」「子ども理解」「教室環境」の3要素から方策を立て、学級経営を展開していると考えられる。「集団形成」を集団への関わり、「子ども理解」を個への関わりとすると、集団と個のバランスを考えながら子どもと関わる場を設定し、教育理念の実現に向けた取組を展開しているといえるだろう。また、環境美化に努めたり、子どもの成長の記録や目標等を掲示したりして、子どもが過ごしやすい環境づくりに努めていると考えられる。学級経営の構造を図1に示す。

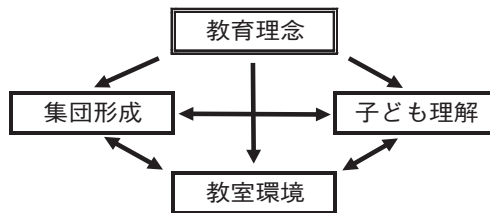


図1 学級経営の構造

(2) 各要因・要素の構造

① 第1要因「教育理念」の構造

第1要因「教育理念」においては、「豊かな心の育成」「健康教育」「その他の理念」の3つの要素が抽出された。「豊かな心の育成」においては、全ての学級経営案から抽出されたことより、学級経営を進める上での根幹となっているといえる。その内容は、相手・思いやり・感謝・協力・助け合い等であり、これらの視点をもって具体的方策を立て、学級経営を推進していると考えられる。

「健康教育」においては、体力向上・食育・基本的な生活習慣の確立・安全に関する内容が多く抽出された。この要素の傾向としては、例えば、1～3学年の学級経営案において、基本的な生活習慣の確立に向けた取組を行う等、発達段階や子どもの実態に応じて、学級経営の方針を決めていることがわかる。「その他の理念」においては、継続・挑戦・粘り強さ等に関する内容が多く抽出された。これは、各教師がもっている教育観や子ども像が反映していると考えられる。

② 第2要因「集団形成」の構造

第2要因「集団形成」においては、「目標設定」「規範意識」「支持的風土」「自治的・集団的活動」の4つの要素が抽出された。「目標設定」においては、全ての学級経営案から抽出された。この要素を時間軸でみると、長期目標（年間を通した学級目標等）、中期目標（毎学期・毎月の目標等）、短期目標（毎週・毎日の目標）があった。また、それぞれに、行動目標（昼休みに全員で縄跳びの練習をしよう等）と結果目標（縄跳び大会で〇〇を目指す等）に類別することができた。教師は、子どもが常に目標をもって学校生活を送ることができるように、また、「教育理念」の達成に向けて、時間的な視点と内容的な視点をもって継続的に関わっているといえる。「規範意識」においては、基本的な学級の指針や規律に関する内容が示されていた。例えば、学級のルール・約束、挨拶等である。これらは、学級集団としての基盤づくりの役割を担っていると考えられる。また、ほめ

方・叱り方に関連した教師の方向性や指導時の留意点も多く抽出された。子どもを叱ることを通して、善悪の判断・道徳性の向上等につなげようとしていると考えられる。ほめ方については、大きく2つの効果を期待し行っていると考えられる。1つ目が、該当の子どもがもつよさを発見しほめる・認める（価値付けする）ことを通して、子ども自身の可能性に気付かせたり、自信をもたせたりすることにつなげる効果である。これは、「子ども理解」や「信頼関係」とも関連している取組である。2つ目が、ほめることを通して、学級全体にそのよさを広げていこうとする効果である。これは、「規範意識」や「支持的風土」とも関連している取組である。このように、ほめ方・叱り方については、複数の要因・要素との関連が高く、学級経営の柱の1つになっていると考えられる。「支持的風土」においては、他者のよさを発見するといった内容が多く抽出された。その傾向としては、学年が上がるごとに、子どもが中心となって班活動や話し合い活動等を行う場が設定されていた。この取組を通して、友達を肯定的・受容的に受けとめようとする態度を育成し、互いに尊重し合うことのできる学級集団の構築につなげているといえるだろう。「自治的・集団的活動」においては、全学年を通して抽出された内容が3つ挙げられる。1つ目が、集団遊びの場の設定である。この取組を通して、友達づくりやよりよい人間関係の構築につなげ、集団としてのまとまりをつくったり、学級への所属意識を高めたりしていると考えられる。2つ目が、係活動に関する取組である。一人一人の役割を与えることで、学級の中での子どもの居場所をつくったり、自分自身の存在価値を見いだしたりすることにつなげていると考えられる。3つ目が、行事等に向けた取組である。集団で一つの目標を立て、その達成に向けて一致団結したり協力したりして活動を展開していこうと考えていることが分かる。これらの内容は、「目標設定」や「支持的風土」とも深く関連している。

③ 第3要因「子ども理解」の構造

第3要因「子ども理解」においては、「信頼関係」「実態把握」「問題対応」の3つの要素が抽出された。「信頼関係」においては、学級経営案に記述されてある内容より、複数の要因・要素と関連していることが明らかになった。ただ、その根本に共通していることは、教師として子どもとどのように向き合うのかということであった。基本姿勢としては、肯定的な評価・受容的態度・応答的環境といったことにまとめることができる。例えば、要素「実態把握」の取組と関連して個人面談を行ったとしても、教師と子どもの信頼関係を築いておかなければ、効果的な面談は成立しない。日々の暮らし全般を通して、上記に挙げた3つの視点で子どもと関わりながら、信頼関係を築こうとしていることがわかる。「実態把握」においては、子どもの状態を把握するために、子ども一人ひとりと関わる時間を設定する、アンケートによる実態調査を行う、観察記録を継続して行い個別の変容を見取る等が挙げられた。この取組は、いじめを未然に防いだり、学習面・生活面・心理面等に関する悩みの早期発見につなげたりすることができる。また、子どもを多面的視点で理解することに役立つと考えられる。「問題対応」においては、様々な問題が発生することを前提として、学級経営案を作成していることがわかる。例えば、その場で対応できると考えられる問題にはタイミングよくその場で指導を行う、学級集団として対応が必要だと考えられる場合は学級で話し合う場を設定する、問題の背景が複雑な場合は組織的に対応する等である。問題の所在・

背景に応じて、対応の仕方を変えているといえるだろう。

④ 第4要因「教室環境」の構造

第4要因「教室環境」においては、「環境美化」「掲示物作成」の2つの要素が抽出された。「環境美化」においては、日々の清掃活動における約束事を決めたり、環境美化に関する行動の習慣化を図ったりする取組がみられた。これらの取組を通して、気持ちよく過ごすことができる教室空間をつくろうとしていることがわかる。「掲示物作成」においては、3パターンの活用法が抽出された。1つ目は、目標等に関する内容である。これらを掲示することで、学級で掲げている目標を意識させたり、目標達成に向けた現在の状態を把握させたりしながら教育理念の達成につながっていると考えられる。2つ目は、学級内で発見したよさに関する内容である。これらを掲示することで、学級全体によさを広めたり、支持的風土づくりにつながったりしていると考えられる。また、学級通信に発見したよさを記載する取組も多く挙げられていた。学級のよさを可視化する取組といえる。3つ目は、子どもの成長の様子に関する内容である。これらを掲示することで、学級への所属意識を高めたり、自分自身や学級集団としての成長に気付かせたりしていると考えられる。

5 課題

学級経営案から抽出した文章等の中で、複数の要因・要素に重なりがあったり、関連したりしているものが多く挙げられた。今回の研究においてカテゴリー分けをしたが、1つのカテゴリーだけでは十分に説明することができない方策があるということである。つまり、要因と要素・要素と要素が複雑に絡み合いながら学級経営を行っているということになる。本研究では、この関連性を十分に分析することができていない。この関連性、例えば、Aという教育理念に対応してB-Cという具体的方策を立てる等について検討していく必要がある。この関連性を明らかにできれば、教師の学級経営の傾向、及び、その構造がより明確になると考える。

今後は、今回の研究で抽出されたカテゴリー、及び、内容をもとにして質問紙を作成し、量的な手法による分析（各要因・要素と教職歴・性別・担当学年等の関連）を行う等して、教師自身が、自分の学級経営に関する取組を振り返ることができる尺度の作成につなげていく。

引用文献

- 1) 鳥海不二夫 石井健一郎 (2007) 「学級集団形成における教師による介入の効果」『電子情報通信学会誌』 Vol. J90-D NO. 9 pp2456-2464
- 2) 文部科学省 (2008) 『小学校学習指導要領解説特別活動編』 東洋館出版 p50
- 3) 岩島亜紀子 (2012) 「学級活動(1)の話し合い活動を中核にした学級経営 ―話し合い初期段階の学級における教師の指導に着目して―」『教育実践研究』 第22集 pp249-254

参考文献

- 林夏代・木村直子（2016）「学級経営における小学校教師に必要な資質能力に関する研究」『兵庫教育大学教育実践学論集』第17号 pp153-165
- 石川美智子（2016）「学級経営の動向 ―学級の変遷・戦後の学級経営論文と小学校教師への調査―」『佛教大学教育学部論集』第27号 pp15-32
- 国立教育政策研究所（2000）「学級経営をめぐる問題の現状とその対応」『国立教育研究所広報』第124号
- 国立教育政策研究所（2005）『学級運営等の在り方についての調査研究（報告書）』
- 文部科学省（2009）『教員を目指そう（パンフレット）』 初等中等教育局教職員課
- 菅野宏隆（共）小島宏（編）（2008）「子どもとの信頼関係の構築」『新編学級経営読本 教職研修総合特集』NO. 180 教育開発研究所
- 高平小百合 太田拓紀 佐久間裕之 若月芳浩 野口穂高（2014）「小学校教師にとって何が困難か？ ―職務上の困難についての新任時と現在の分析―」『玉川大学教育学部紀要』pp103-125
- 田中博史 福山憲一 藤木美智代 青木伸生 尾崎正彦 森川正樹 高倉弘光 金大竜 沼田晶弘 胡子美由紀 福地孝宏 岩下修 野口芳宏（2017）『授業力&学級経営力』明治図書 pp4-57
- 中央教育審議会（2012）「教職生活の全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策について（答申）」

（いしはら つとむ：人間科学科 准教授）

